

1. 【弥生時代・古墳時代の漢字音】

漢字の読み方には呉音と漢音があって、訓は漢字渡来以前から日本列島で話されていた「やまとことば」を同じ意味をもったことばに漢字にあてはめたものである、というのが通念であり、学校ではおよそ、そのように教わる。

しかし、「やまとことば」といわれるもののなかには漢語起源のことばが数多く含まれていることが分かってきた。

和 語		漢 語	
訓 1	訓 2	音 1	音 2
やまとことば	弥生音	呉 音	漢 音

日本が本格的な文字時代に入るのは記紀万葉の時代（8世紀）のことである。しかし、日本列島の住人は、弥生時代の初めから古墳時代を通じて、記紀万葉の時代より千年も前から中国の古代文明の影響を受けていた。ことばも文明の乗り物として日本列島に入ってきた。ここでは、記紀万葉以前の中国語からの借用語音を「弥生音」と呼ぶことにする。

2. 【カールグレンの卓見】

スウェーデンの言語学者ベルンハルト・カールグレン(1889-1978)は”Philology and Ancient China” Oslo,1920 のなかで、中国語からの借用語と思われることばを二十数個あげている。

馬(うま)、梅(うめ)、邑(いへ)、室(さと)、築(つく)、櫛(かき)、析(さく)、闕(ゆか)、絹(きぬ)、秬(しね)、蜨(かひこ)、竹(たけ)、麦(むぎ)、松(すぎ)、琢(とぐ)、剥(はぐ)、湿(しほ)、郡(くに)、盆(ふね)、柑(かま)、鎌(かま)、熱(ねつ)、熊(くま)、酪(さけ)、

3. 【亀井孝の反論】

国語学会の重鎮であり、開明的な言語学者でもある亀井孝(1912-1995)は”Chinese Borrowings in Preliterate Japanese”という英語の論文を書いて、カールグレンの提案をほぼ全面的に否定し、漢語到来以前の「やまとことば」は純粹であると主張した。

「あるいは認めてよいかわかれる例」は馬(うま)、梅(うめ)、絹(きぬ)、郡(くに)だけであり、そのほかについてはすべて「間違いなく誤り」あるいは「多分に疑わしい」とした。

4. 【弥生音の例】

音韻変化には法則がある。借用語の場合も、音の転移については法則性が認められる。まず、カールグレンのあげる例のうち、亀井孝も「あるいは認めてよいかわかれる例」としている馬(うま)、梅(うめ)についてみると、唐代の中国語音は馬[mea]、梅[mua]であ

る。[m]は両唇音であり、[u]は合音であり調音の位置が同じであり、音価も近い。訓の馬（うま uma）、梅（うめ ume）は中国語の馬[mea]、梅[muə]に同系の母音「う」を付けて日本語として発音しやすくした「弥生音」だと考えられる。

王力は『同源字典』のなかで、「調音の位置が同じことばは転移しやすい、また、調音の方法が同じことばは転移しやすい」としている。馬（うま）、梅（うめ）のような例はほかにもある。

○母音+[-m]の例：

梅[muə]（うめ）、馬[mea]（うま・むま）、味[miuəi]・美[miei]（うまし・うまい）、埋[mət*/məi]・没[muət]（うもる）、牧[miuək]（むかまき・みまき）、妹[muəi]（いも）、夢[miuəng]（いめ・ゆめ）、母[muə]（おも<古語>）、海[(h)muə*]（うみ<毎>）、
*は上古音をあらわす。

唐代の中国語音については王力の『同源字典』を援用した。白川静の『字通』も王力の方式を採用している。

- ・万葉集では「馬」は「牟麻（むま）」と表記された例がある。
- ・万葉集では「美酒」を「うま酒」とし、「美（うまし）国」などの表現もある。
- ・「母」は万葉集では母（おも）と読まれることがある。朝鮮語は母（オモニ）である。
- ・「海」の声母は毎[muə]であり、海（うみ）は中国語の海[muə]に母音が添加されたものである。「海」の上古音には入りわたり音[h]があり、音の海（カイ）は入りわたり音が発達したものである。

5. 【弥生文化と古代中国文明】

稲作や鉄の文化をもった弥生時代には、それに伴って「ことば」も大陸からもたらされた。弥生文化の基本語彙のなかには、中国語と同源のことばが多い。

田[dyen]（た）、米[(h)myei*/myei]（こめ）、秬[shean]（しね・いね）、麦[muək]（むぎ）、稗[pie]（ひえ）、竹[tiuk]（たけ）、牛[ngiuə]（うし<朝鮮語では소 so>）、魚[ngia]（うお<어 eo>）、蛭蠱[keap-ko]（かひこ）、絹[kyuan]（きぬ）、金[kiam]（かね）、鎌[(h)liam*/liam]（かま）、
[< >は朝鮮漢字音を表す]

- ・宮田一郎編著の『上海語常用同音字典』によると、「田」は現代の上海音では韻尾が脱落して田(di)であるという。訓の田（た）は古代江南音を継承した「弥生音」である可能性がある。
- ・カールグレンは上古中国語には語頭に複数子音があったのではないかとしている。確かに、漢字には果(カ)・裸(ラ)のように同じ声符をカ行とラ行に読み分けるものがある。宮田一郎編著の『上海語常用同音字典』によると、現代の上海語では「米」「鎌」は米(hmi)、鎌(hli)のように語頭に声門閉鎖音が聞こえるという。日本語の米（こめ）、鎌（かま）は古代江南音の声門閉鎖音を継承した「弥生音」である可能性がある。

- ・「秬」はうるち米のことである。日本語の「いね」には現在では「稲」が使われているが、「いね」は秬[shean]の語頭音が口蓋化の影響で脱落したものである。
- ・「牛」の「う」は牛[ngiuə]の頭音が脱落したものである。疑母[ng-]は朝鮮漢字音では規則的に脱落して牛(ㄱ u)となる。朝鮮語の「牛」は牛(소 so)である。日本語の牛(うし)は朝鮮語の牛(ㄱ u)と、朝鮮漢字音の牛(소 so)を併記したいわゆる両点であろう。朝鮮語では音<牛(ㄱ u)>と訓の<牛(소 so)>を併記する両点という方法がしばしば行われている。
- ・「蚕」は万葉集に「養ふ子」とあるので、「飼ふ子」が語源であるとされている。しかし、蚕(かひこ)の語源は中国語の蛭蠱[keap-ko]であろう。
「夾」は「山峽(やまかひ)」などの「かひ」であり、旧仮名遣いでは蛭[keap]は蛭(てふ)である。中国語の韻尾[-p]は古代日本語では「ハ行」であらわれた。
- ・「絹」は絹[kyuan]の韻尾[-n]に母音が添加されて「ぬ(nu)」になった「弥生音」である。古代日本語は開音節(音節が母音で終わる)であり、「ん」という音節はなかった。
- ・「金」(かね)も金[kiam]の韻尾の[-m]に母音が添加された「弥生音」である。古代日本語では韻尾の[-m]と[-n]は弁別されていなかったのも、中国語の韻尾[-m]は「ナ行」に転移した。

韻尾の[-m]と[-n]は現代の中国語では広東音では区別されているが、北京音では区別は失われている。また、朝鮮漢字音では[-m][-n]の区別は保たれている。

唐代中国語音	広東音	上海音	北京音	朝鮮漢字音	日本漢字音	訓
金[kiam]	gam	jin	jin	금(keum)	キン	かね
絹[kyuan]	hyun	juoe	juan	견(kyeom)	ケン	きぬ
秬[shean]	sin	xi	xian	선(seon)	セン	しね・いね
鎌[(h)liam*]	gim	ji	jian	검(kyeom)	レン	かま

6. 【唐代中国語の音韻体系・紐表】

漢字の読み方は地方によって大きく異なっていた。唐代には漢詩の正しい読み方、韻の踏み方を示すために、切韻や韻鏡などが作られた。

中国語には仮名(音声文字)がないから、漢字二字で音をあらわす反切という方法が行われた。例えば、米(密禮切、荠韻)、麥(暮核切、音脈陌韻)、竹(猪郁切、屋韻)などで、これは江戸時代の漢学者を大いに悩ませた。切韻は循環論になっていて、米は「密禮」とあるが、米の音価を知るためには「密」と「禮」の音価をあらかじめ知らなくてはならない。「密」は密(寐逸切、質韻)であり、「禮」は禮(力米切、荠韻)とある。その上に中国語には四声があるから、さらに大変である。

反切では4万を越えるという漢字の読み方を一つ一つ覚えなければならなかった。韻鏡でも日本語の五十音図にあたるものが43枚もあって、その構造はきわめて複雑である。王力はそれを紐表と韻表の二つの図にまとめて、中国語の音韻体系を整理した。

紐表

		塞 音			鼻 音	辺 音	擦 音	
		清 音		濁 音			清 音	濁 音
		不送氣	送 氣					
喉 音		影[○]						
牙 音 (舌根)		見[k]	溪[kh]	郡[g]	疑[ng]		曉[x]	匣[h]
舌 音	舌 頭	端[t]	透[th]	定[d]	泥[n]	来[l]		
	舌 面	照[tj]	穿[thj]	神[dj]	日[nj]	喻[j]	審[sj]	禪[zj]
齒 音	正 齒	莊[tzh]	初[tsh]	牀[dzh]			山[sh]	俟[zh]
	齒 頭	精[tz]	清[ts]	從[dz]			心[s]	邪[z]
脣 音		幫[p]	滂[ph]	並[b]	明[m]			

王力は、この表で横に並ぶものは調音の位置が同じであり転移しやすい、とした。また、縦に並ぶものは調音の方法が同じであり、転移しやすい。したがって、この表で縦に並ぶ音は転移しやすく、同源語が多い。また横に並ぶ音にも同源語が多い、という。

王力は「音近ければ、義近し」としている。つまり、中国語の発音は時代により、また地方により変化しているが、その変化の方向は、調音の位置に近いものは転移しやすく、また、調音の方法が同じものも転移しやすく、同源語が多い。

この法則は西洋言語学における、グリムの法則やヴェルネルの法則にも匹敵するものである。

7. 【唐代中国語の音韻体系・韻表】

甲 類	之[ə]	支[e]	魚[a]	侯[o]	宵[ô]	幽[u]
	職[ək]	錫[ek]	鐸[ak]	屋[ok]	沃[ôk]	覺[uk]
	蒸[əng]	耕[eng]	陽[ang]	東[ong]		
乙 類	微[əi]	脂[ei]	歌[ai]			
	物[ət]	質[et]	月[at]			
	文[ən]	真[en]	元[an]			
丙 類	緝[əp]		盍[ap]			
	侵[əm]		談[am]			

(王力『同源字典』による)

韻についても、この表で甲類の[-k]と[-ng]は調音の位置が同じ（口腔の奥）であり、音価に近い。また、乙類の[-t]と[-n]は調音の位置が同じ（歯茎の裏）であり、音価に近い。丙類

の[-p]と[-m]は調音の位置が同じ（唇音）であり、音価が近く、転移しやすい。

8. 【頭音の転移（1）】中国語の[l]

古代日本語には「ラ行」音ではじまることばはなかった。中国語で[l]ではじまることばは訓では「タ行」、「ナ行」などに転移した。[t][d][n][l]は調音の位置が同じ（歯茎の裏）であり、転移しやすい。

○[l-]⇒「タ行」：龍[liəŋ]（たつ）、瀧[leŋ]（たき）、立[liəp]（たつ）、粒[liəp]（つぶ）、

○[l-]⇒「ナ行」：浪[laŋ]（なみ）、梨[lie*/liei]（なし）、練[lian]（ねる）、

○[l-]⇒「マ行」：中国語の[l]（調音の位置が歯茎の裏）は[m]（唇音）と調音の位置が近い
ため、訓では「マ行」であらわれることがある。

覧[laŋ]（みる・ラン）、漏[lo]（もる・ロウ）、嶺[liəŋ]（みね・レイ）、

乱[luan]（みだる・ラン）、六[liuk]（むつ・ロク）、

中国語でも、同じ声符をもった漢字が[l]と[m]に読み分けられる場合がある。

命[miəŋ]・令[liəŋ]、睦[miuk]・陸[liuk]、

○[l]の脱落：訓では中国語の頭音[l]が脱落することがある。朝鮮漢字音では、[-i-]介音を伴う場合は、規則的に脱落する。[< >は朝鮮漢字音を表す]

柳[liu]（やなぎ<유 yu>）、陸[liuk]（おか<육 yuk>）、梁[liang]（やな<양 yang>）、

良[liang]（よき・よい<양 yang>）、

9. 【頭音の転移（2）】中国語の喉音[x][h]

中国語の喉音[h][x]は日本語にはない音である。調音の位置が「カ行音」に近いので、音では「カ行」であらわれるが、訓では「ハ行」であらわれることが多い。

○訓「ハ行」・音「カ行」：火[xuəi]（ひ・カ）、灰[huai]（はい・カイ）、花[hua]（はな・カ）、
降[hoang]（ふる・コウ）、弘[huəŋ]（ひろい・コウ）、惚[xuət]（ほれる・コツ）、

10. 【頭音の転移（3）】口蓋化

日本漢字音は唐代の中国語音に依拠したものである。しかし、訓のなかには弥生時代、古墳時代を通じて古代中国文明とともに日本に入ってきた「弥生音」が多い。

○訓「タ行」・音「サ行」：中国語音韻史によると、隋代から唐代にかけて、[-i-]介音が発達し、口蓋化が起こったとされている。訓の照（てる）は「やまとことば」ではなく、唐代以前（口蓋化以前）の中国語音を継承したものであり「弥生音」である。音の照（ショウ）は口蓋化した後の、唐代の中国語音に依拠したものである。

照[tjiô]（てる・ショウ）、出[tjiuət]（でる・シュツ）、常[tiang*/zjiang]（つね・ジョウ）、

床[diak*/dzhiang]（とこ・ショウ）、作[tzak]（つくる・サク）、

苔[tjiam*/sjiam]（とま・セン）、占[tjiam]（しめる・セン）、野[djya*/jia]（の・ヤ）、

- ・「野」の声符「予」は予(ヨ)、あるいは序(ジョ)とされているが、万葉集では智杼利(ちどり)などのように杼(ド)に使われている。古代日本語では濁音が語頭に立つことはないので「野」は野(の)であらわれたと考えられる。
- ・同じ声符の漢字が口蓋化されることがある。例：迭[dyet]・失[siet]・佚[jiet]、

11. 【頭音の転移(4)】鼻音

- 訓「ナ行」・音「マ行・バ行」：中国語の[m]は「弥生音」では「ナ行」であらわれることが多い。[n]と[m]はいずれも鼻音であり、調音の位置も近く、転移しやすい。
- また、[m]は[b]と調音の位置が同じあり、音では「バ行」であらわれることがある。古代日本語では語頭に濁音がくることがなかった。
- 無[miua] (ない・ム)、苗[miô] (なえ・ビョウ)、猫[miôk*/miô] (ねこ・ビョウ)、鳴[mieng] (なく・メイ)、寐[muət*/muəi] (ねる・ビ)、眠[men] (ねむる・ミン)、

12. 【頭子音の脱落】

- [nj-]の脱落：中国語の日母[nj]は現代中国語では[r]となり、「日本」は日本(ri-ben)となる。また、朝鮮語では日母[nj-]は脱落して、日本(일본 il-bon)である。日本語の訓(弥生音)でも、日母[nj]は脱落することがある。
- 熱[njiat] (あつい<열 yeol>)、閏[njiuən] (うるう<윤 yun>)、弱[njiôk] (よわい<약 yak>)、讓[njiang] (ゆずる<양 yang>)、柔[njiu] (やわら<유 yu>)、入[njiəp] (いる<입 ip>)、
- [ng-]の脱落：中国語の疑母[ng]は朝鮮漢字音では規則的に脱落する。日本語の訓(弥生音)でも、脱落することが多い。
- 我[ngai] <아 a>・吾[nga]<오 o> (あ・われ)、顎[ngak] (あご<악 ak>)、魚[ngia] (うお<어 eo>)、牛[ngiua] (うし<우 u・소 so>)、
- 「牛」の朝鮮語は牛(소 so)であり、日本語の牛(うし)は朝鮮漢字音の牛(우 u)に朝鮮語の牛(소 so)を併記した、いわゆる両点(二か国語併記)である。
- [l-]の脱落：[l]は古代日本語や朝鮮語では、語頭に來ることのない音であった。そのため、訓(弥生音)では中国語の[l]は語頭で脱落することが多い。朝鮮漢字音では[-i-]介音が後ろに來る場合は規則的に脱落する。
- 良[liang] (よき・よい・リョウ<양 yang>)、柳[liu] (やなぎ・リュウ<유 yu>)、陸[liuk] (おか・リク<육 yuk>)、梁[liang] (やな・リョウ<양 yang>)、

13. 【韻尾音の転移(1)】[-m][-n]の弁別

韻尾の[-n]と[-m]はいずれも鼻音であり、調音の方法が同じである。[-n]は歯茎の裏で調音されており、[-m]は唇音であり、調音の位置も近い。日本漢字音では中国語の韻尾[-n]と[-m]は弁別されず、中国語の韻尾[-n][-m]は音では「ン」であらわれる。

中国語の浜[pien]も文[miuən]も「ナ行」ではなく、「弥生音」では浜(はま hama)、文(ふみ fumi)と、いずれも「マ行音」であられる。

一方、金[kiəm] (かね)、兼[hyam] (かねる)のように、中国語の韻尾[-m]が訓(弥生音)では「ナ行音」であられることがある。日本語では[-n]と[-m]は弁別されていない。

○[-n][-m]+母音の例：

- ・「ナ行」の例：殿[dyən] (との)、絹[kiuən] (きぬ)、金[kiəm] (かね)、稔[njiam] (みのる)、兼[hyam] (かねる)、
- ・「マ行」の例：埧[kam] (かま)、沁[tsiəm] (しみる)、君[giuən] (きみ)、浜[pien] (はま)、文[miuən] (ふみ)、蟠[buan] (へみ・へび<蛇>)、蟬[zjian] (せみ)、

14. 【韻尾音の転移 (2)】「ラ行音」への転移

古代日本語では語頭に[l]音がくることはなかったが、韻尾の[-t]や[-n]は訓では「ラ行」に転移することが多い。朝鮮漢字音では中国語の韻尾[-t]は規則的に[-l]に転移する。

- [-t]⇒「ラ行」：払[piuət]<불 pul>・祓[buat] (はらう<불 pul>)、
出[thiuət] (でる<출 chul>)、掘[giuət] (ほる<굴 kul>)、擦[tsheat] (する<찰 cjal>)、
○[-n]⇒「ラ行」：漢[xan]・韓[han] (から・カン)、昏[xuən] (くれ・コン)、
巾[kiən] (きれ・キン)、樽[tzuən] (たる・ソン)、塵[dien] (ちり・ジン)、
散[tian*/san] (ちる・サン)、

15. 【上古音の痕跡 (1)】入りわたり音

スウェーデンの言語学者 B・カールグレンは古代中国語には語頭に複合子音があったのではないかとしている。漢字音のなかには果(カ)・裸(ラ)、あるいは監(カン)・覧(ラン)のように、同じ声符を「カ行」と「ラ行」に読み分けるものがある。

宮田一郎編著の『上海語常用同音字典』のなかで、現代の上海語では(l-)や(m-)の前に喉音(h)あるいは喉門閉鎖音(?)が聞こえるという。訓(弥生音)の「カ行音」は古代江南音の痕跡である可能性がある。

- [(h)l*]⇒[l]：鎌[(h)liam*/liam] (かま・レン)、籠[(h)lok*/long] (かご・こもる・ロ)、
栗[(h)liet*/liet] (くり)、輪[(h)liuən*/liuən] (くるま・リン)、
來[(h)lə*/lə] (くる・ライ)、果・裸、監・覧、
○[(h)m*]⇒[m]：[m]の前にも入りわたり音[(h)*]があったと考えられる。
米[(h)myei*/myei] (こめ)、蕪[(h)mua*/mua] (かぶ)、門[(h)muət*/muən] (かど)、
雲[hiuən*/iuən] (くも<구름 ku reum>)、熊[hiuəm*/jiuəng] (くま<곰 kom>)、
毛[(h)mô*/mô] (け)、海[(h)muə*/xuə] (うみ<바가 pa da>)、

16. 【上古音の痕跡 (2)】韻尾音の転移

音韻学の進歩により、唐代の中国語音から上古音を復元することも可能になった。唐代の

[-ng]は上古音では[-k*]であり、唐代の[-n]の上古音は[-t*]であったことが明らかになっている。

○[-t*]⇒[-n]：唐代の韻尾[-n]の上古音は[-t*]であった。

肩[kyat*/kyan]（かた）、腕[uat*/uan]（うで）、堅[kyet*/kyen]（かたい）、
管[kuat*/kuan]（くだ）、幡[phuat*/phiuan]（はた）、綿[muat*/mian]（わた）、
綿（わた）の[m]は唇音であり、合音[w]と調音の位置が同じであり、転移しやすい。

○[-k*]⇒[-ng]：唐代の韻尾[-ng]の上古音は[-k*]であった。

床[diak*/dzhiang]（ゆか・とこ）、丈[dak*/diang]（たけ）、茎[hek*/heng]（くき）、
影[kak*/yang]（かげ）、塚[tok*/tiong]（つか）、羊[jiak*/jiang]（やぎ）、
清[tsiek*/tsieng]（すがし・すがすがし）、双[sheok*/sheong]六[liuk]（すごろく）、
・「羊」の上古音は羊[jiak*]であり、弥生音では羊（やぎ）であったが、唐代には羊[jiang]
になってしまったため、山羊、あるいは野羊と表記するようになった。
・同じ声符の漢字を読み分ける例もある。例：卓・哀悼、各・格子、白・拍子、
・日本の古地名でも唐代の[-ng]を[-k*]で読むものがある。
相（さが）模、伊香（かご）、香（かぐ）山、楊（やぎ）生、

17. 【上古音の痕跡（3）】入声音の脱落

日本語は開音節（母音で終わる音節）であるので、日本漢字音のなかには中国語の韻尾
[-k][-t][-p]は発音しないものがみられる。しかし、訓（弥生音）には入声音の痕跡がみられ
る。

○時[dək*/zjiə]（とき・ジ<特[dək]>）、墓[mak*/ma]（はか・ボ<莫[mak]>）、
酒[tziuk*/tziu]（さけ・シュ<酢[dzak]>）、

現代の中国語では、広東音では韻尾の[-p][[-t][-k]は保たれているが、北京音では失われ
ている。

18. 【人体名称の対応】

人間の手足、目耳などの名称は変わりにくい。言語学者のスワデッシは基礎語彙として人
体の名称を多くあげているが、日本語の人体名称は中国語と同源のことが多い。

○顔貌[ngean-mau]（かお・かを）、目[miuk]（め）、眉[miei]（まゆ）、毛[(h)mô*/mô]（け）、
額[ngak]（ぬか<古語>）、頬[kyap]（ほお・ほほ）、耳[mia*/njiə]（みみ）、
口嘴[kho-tziue]（くち）、牙[ngea]・歯[thjiə]（は）、舌[djiat]（した）、
唾沫[tuai-muat]（つば）、顎[ngak]（あご<악 ak>）、頸[kieng]（くび）、
肩[kyat*/kyan]（かた）、腕[uat*/uan]（うで）、脊[tsiek]（せ）、腋[iuak*/jyak]（わき）、
手[tu*/sjiu]（て）、腹[piuk]（はら）、腹臍[piuk-dzyei]（へそ）、肝[kan]（きも）、
脛[hyek*/hyeng]（はぎ）、下肢[hea-tjie]（あし）、脚踵[kiak・tjiong]（かかと）、

19【漢字文化圏のことば】

日本語は中国語とは文法などが違い、違う系統の言語だと考えられているが、語彙は中国語との同源語が多い。また、日本語の文法の構造は朝鮮語に近い。朝鮮語も中国語起源の単語が多い。言語の起源が不明なように、日本語の起源についても分からないことが多い。

「ことば」の成り立ちは起源から説くのではなく、現代の日本語から、文字時代の初めに遡り、もし日本語や朝鮮語のように初期の文字が漢字だったとすれば、漢字の歴史を唐代から、さらに上古音へとさかのぼって復元すべきものではなかろうか。

川の源流をたどるにも、源流から本流に至るのではなく、本流から水源を求めて遡るのが正しい方法論ではあるまいか。日本語も朝鮮語も、その成立は語彙的には漢字文化圏のことばだということができる。

ヨーロッパの言語でもケルト語、バスク語、カタルーニア語、プロバンス語などの現地語の基層の上に、キリスト教（旧教）の広がりとともに、ラテン語がリング・フランカとして覆いかぶさり、ラテン文化圏を構成していった。

その意味では日本語も朝鮮語もベトナム語も中国語文化圏のことばとして形成されていた、といえるのではなかろうか。